

## 見性院住職からの一言(その二、宗教ジャーナリストからの質問に答えて)

### ①私の宗教的経営観

現在見性院が行っている行為は宗教活動なのか経済活動なのか疑問を呈している方がおられるのも事実です。しかしながら私の主張は、究極的宗教経済活動といえるものではないかと思えます。私の持論・哲学ではありますが、宗教も経営もビジネスも最終的には一元化に帰すと思えます。なぜなら宗教も経営もビジネスも人々を幸せにするものであり、世のため人のためになるものが繁栄する点はみな同じだからです。その哲学とは詮ずるところ無心にして利益を追わないものであり、私利私欲を捨てることが目的だからです。私個人の考えとしてはいまの仏教界、お寺社会にはそうした基本的な哲学すら存在していないと思えます。そのため「今の宗教者は経営者たれ」と言っているのです。ただ宗教者と経営者が一点だけ違う点は宗教者はあくまでも聖職者であって清貧を目指さなくてはならない存在なのです。だからこそ経営感覚を持たないかぎり、寺は生き残れないと一連の主張をしている理由です。その心はいまやいよいよ本物の宗教者、仏教者であることの本質や実体が問われているのです。

### ②私の葬儀観

葬儀の目的は二つに分けられると思えます。一つは故人への感謝と追憶です。還元すれば冥福と成仏を祈るものかと思えます。二つ目は残された遺族や有縁のある人達にとって故人亡き後の人生をいかに生きるべきかを考える場ではないかと思えます。つまり葬儀を行うことによって宗教者は参列された方々に対して一定の宗教的示唆を与えることが使命です。明日からの人生を少しでも楽にしてあげること、あるいは心の整理やけじめをつけることに対して、高所大所から法を説くことが重要かと思えます。それが私の考える葬儀の目的です。

### ③無縁社会と仏教について

誤解を恐れずに言えば「無縁社会」、結構ではないかと思えます。「有縁社会よし、無縁社会さらによし。」仏教はそもそも出世間から始まった出家主義の宗教です。ですからある意味、仏教は無縁社会から始まった宗教です。お釈迦様はしがらみを立ち切って俗世を離れたわけです。ですからおそらく釈迦は言うでしょう「無縁社会、結構。」一人になった釈尊は法句経の中で『犀の角のごとくただ一人歩め』と言われた釈迦の言葉はあまりにも有名です。ですから私個人としては無縁社会に特に問題なしと言わせていただきたいと思えます。そのような社会のなかで人々は苦悩と向き合い孤独に耐えて自立していくことが重要です。人間社会のなかで人々は自己研鑽によって苦悩から解脱を目指すべきです。禅仏教の目的は自己の究明（自分を知ること）です。繁雑な世の中では自己を見失うばかりです。いまこそ私は世に

問いたい。「しがらみを断て。そして自ら立ち上がれ」とあえて仏教者らしくないことばかり述べているかもしれませんが、一度突き放したうえで自立支援をしていくのが本来の社会のありかたです。

#### ④遺骨とは何か。(送骨をめぐる)

そもそも遺骨とは人なのか物なのか魂なのかいずれもわかりかねる問題です。個人の体の一部であるべきなら髪の毛でもいいわけです。死者が存在するのかもしれないのかあくまでも私は唯物論者ではなく唯心論者であります。故人がいるかないかは心の問題であって誰も証明はできません。究極的にはお墓にも仏壇にも死者はいるかないか誰にもわかりません。これが宗教の世界です。ですから遺骨イコール仏様という定義は成り立たないわけです。あえて言えば丁重に葬ることだけが問題なのです。いまの便利な物流の発達した時代にそのシステムを有効に利用することが生活向上の上でも有益かと思います。宗教だけが聖域であると嘯(うそぶ)いてきた当該社会にこそ実は問題があるのではないのでしょうか。

#### ⑤これからのお寺の未来像

寺の檀家制度を廃止して、信徒制度にした目的は何か。人々の基本的人権を尊重し個人の自由を重んじる宗教にこそ、宗教の本質があると考えたからです。いまお寺の形態は四つに分類できます。一つ目が檀家寺。家族経営でもって檀家制度を基盤に維持しているお寺のことです。二つ目が観光寺院。三つ目が祈禱寺院。四つ目が信者寺です。この四分類された寺院形態の中でこれからの時代を牽引していく将来性のあるお寺は信者寺です。信者寺とはそのお寺の魅力によって人々が集まってくる寺院、言い方を変えればその寺を司る住職やそれを取り巻く周囲の人達の考えや哲学に賛同する人が集まってくる心と心で結ばれたお寺が注目されてくると思います。一見世俗化した一般社会となんら変わらない集客力のあるお寺が伸びていきます。その中であぐらをかきことなく生涯一修行僧としての本分をわきまえた僧侶が評価されていく社会が注目されていくと思います。いま仏教に必要なことは原点回帰そのものではないでしょうか。そこからあらたな仏教教団を再構築していく時期が到来しているのです。いよいよ本物志向の仏教教団を目指さないかぎり寺院は消滅します。おおきな岐路にたつこの潮流を乗り越えていくには一人一人の僧侶が、自分自身に「道心、あるや、なしや。」を自問自答すべきなのです。そして道心なきものは去り道心ある有志を広く一般社会から迎え入れていくべきなのです。これが私の仏教界への提言です。そして生きた仏教の本質です。